
聖夜の攻防戦

MUKKU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖夜の攻防戦

【Nコード】

N7649J

【作者名】

MUKKU

【あらすじ】

もうすぐクリスマスというある日、警視庁に怪盗キッドから約9ヶ月ぶりに予告状が届いた。

しかし、快斗にはまったく心当たりが無い。

新一、快斗、平次は偽キッドを捕まえるために作戦をたてる。

新一と蘭、快斗と青子、平次と和葉のクリスマスのラブコメもいれる予定。

第1章 心当たりの無いこと（前書き）

時期が今と全く合ってませんが、よろしく願います。

第1章 心当たりの無いこと

クリスマスがあと10日に迫った日、快斗がクリスマスのデートで青子に見せる新作のマジックを練習していると、
タッタツ…

と階段を駆け上がる音がした。

(母さんは今出掛けてるし…誰だ?)

と快斗は警戒して机の上に置いてあったトランプ銃を手に取った瞬間、ものすごい勢いで快斗の部屋のドアが開いて、

「ど〜ゆ〜ことよ〜!!!?バ快斗〜!!!?」

と青子がこれまたものすごい勢いで部屋に乗り込んで来た。

「あ…青子…どうしたんだよ?」

と快斗が青子の勢いに圧倒されながら聞くと、

「どうしたもこうしたもないわよ!!!今お父さんから『怪盗キッドからの予告状が届いたから今日は帰れないかもしれない』って電話が来たのよ!!!どうということかちゃんと説明してもらおうからね!

!快斗!!!」

と青子は本気で怒っていた。

(ハア?)

全く身に覚えの無い怪盗キッド本人である快斗がポカーンとしていると青子は急に俯いて、

「快斗がパンドラを見つけて…青子に快斗がキッドだって教えてくれた後…約束したじゃない…もう泥棒はしないって…キッドは引退するって…なのに…なのに…どうして約束破るのよ〜!?!このバ快斗〜!!!」

と青子は泣きながら快斗に訴えた。

快斗は泣き出した青子に戸惑いながら、

「ま…待て青子!!!俺予告状出してねーし…予告状のことなんて寝耳に水だぜ?何かの間違いじゃねーのか?」

と聞いた。

すると青子はムツとしたように、

「間違いじゃないよ！！青子…お父さんからの電話のとき本当にキッドからの予告状か聞いたらお父さん間違いないって言ってたもん！！」

と答えた。

「けど俺は予告状なんて出してねー！！間違いじゃないってことはつまり模倣犯ってことだ…」

「そうなの…？でもお父さん間違いなくキッドからの予告状だって…」

快斗のセリフで少し冷静になった青子が快斗に聞いた。

「あのへボ警部は偽物の予告状を本物だと判断したこともあるから今回もそれだ！！…俺が青子との約束破るわけねえだろ！！」

と快斗が答えると、

「お父さんはへボ警部なんかじゃないもん！！！」
と怒りだした。

「ケツどうだか？」

と快斗がちゃかしたように言うと、

「なによ〜バ快斗！！」

「なんだと〜アホ子！！！」

とお約束の口喧嘩が始まったのであった。

この口喧嘩はいつもより早くおさまり、5分ほどでおさまった。

(約束か…)

口喧嘩が終わった後、快斗が新しいマジックの練習のために用意していたいろいろな仕掛けに興味をもって見ている青子を見ながら、その約束をした日のことを思い出していた。

第2章 約束 く想い出く（前書き）

今回は快斗の回想シーンが主なので快斗の一人称でやってみました。

今回のは以前書いた『破れない約束』の15章と16章の間の物語なのでそれを読むとわかりやすいかもしれません。

第2章 約束 ー想い出ー

あれは確か新一がまだ小さな名探偵だったころ、俺のオヤジを殺した組織と新一を小さくした組織が一緒にその組織をぶっ潰した時小さな名探偵が大怪我をして俺と一緒に病院に行った後の帰り道だったな…。

あの時、新一（まああの時は小さな名探偵だったけど…）と平次にそそのかされて青子に俺がキッドだと教えた後だったな…。

ーその時ー

き…気まずい…

病院から見て江古田から逆方向の米花町の蘭ちゃん、哀ちゃん、阿笠博士と毛利探偵事務所に泊まる平次と和葉ちゃんと別れた後、俺と青子は2人で一緒に帰っていたけど2人共無言でかなり気まずい空気が流れていた。

そりゃそうだよな…青子があんなに嫌ってた怪盗キッドが俺だったんだからな…。

「な…なあ、青子…」

と話しかけようとすると、

「…しないよね?」

と青子が聞いてきた。

「…ハ?」

と思わず答えると、

「だからー!!もう泥棒しないよね?」

と青子が怒ったように言った。

その後俯いて、

「青子…ヤダよ…キッドよく危ない目遭ってるから…快斗がそんな

危ない目に遭うの見るの…それに快斗がお父さんに捕まらない心配だよ…」

と泣きそうな顔で言った。

俺はその顔を見て顔が赤くなるのを感じながら、

「悪いが青子…そいつは無理だな…」

とキッド特有の笑いを浮かべた。

「快斗？」

と青子が怪訝そうな声をしていた。

「俺にはまだ手に入れねえといけない宝石があるから…」

と言って俺は青子を抱き締めた。

「か…快斗？」

と青子が驚いたように言っていたが、俺は気にせず、

「俺が今一番欲しい宝石は青子だ…青子オメーのことが好きだ!!」

と言った。

こんな時にはポーカーフェイスを保つなんて不可能だよな…。

「……………」

青子の反応が全くなかったから、

「青子？」

と言っ顔を覗き込むと、青子は真っ赤な顔をして放心していた。

面白れえ奴…。

と思っ吹き出すと、青子は我に戻って、

「何よ…!?笑わないでよ…!!」

と怒り出した。

「悪り・悪り…!!」

と笑いながら謝った後、真剣な表情をして、

「で、青子の答えは？」

と聞いた。

すると、青子はまた真っ赤になりながら、

「しょうがないな…その宝石を盗むのだけは青子許してあげる!

!青子も快斗のこと好きだから…」

と答えた。

俺はあまりの嬉しさに、

「ヨッシャー!!!」

と叫んでいた。

すると青子は、

「でも他の物は盗まないって約束して！」

と笑いながら言った。

もちろんそのつもりだった俺は、

「当たり前だ!!!もう盗みは引退さ!!!」

と約束した。

く今

忘れるかよ…バー口…

と思っていると、

「快斗!!!…快斗!!!」

と青子に呼ばれているのに気付いた。

どうやら寝ちまつたみたいだな…。

あの日のことを夢の中で思い出していたのか…。

まあ、青子が呼んでるし起きてやっか!!!

ということだ俺が、

「あんだよ青子?」

と目を覚ますと、

「快斗、電話鳴ってるよ…」

と言われた。

確かに俺の携帯が鳴っている。

誰からだ?

と思っで見ると、

『工藤新一』

と表示されていた。

新一から？珍しいな…。

と思いながら俺は電話に出た。

第3章 電話（前書き）

なんか関西弁が変になってしまったかもしれないです。

第3章 電話

快斗が電話に出ると、

『コラ黒羽！！テメーどういことだ！！？』

と新一の怒鳴り声が電話越しなのに快斗の部屋に響き渡った。

「ウツセーな…なんなんだよ新一？」

と快斗が聞くと、

『とぼけんな！！さっきまで事件が終わって警視庁にいたんだけど、廊下歩いてたら『キッドからの予告状だ！！』って中森警部が叫んでるのが聞こえたんだよ！！テメー、もう盗みをしないって青子ちゃんと約束したんじゃないのか！？』

と言った。

（こいつもかよ…）

と快斗は思いながら、

「さっき青子にも言ったけど、あれは俺じゃねー！どっかのアホの模倣犯だ！！オメーだって4名画の事件で中森警部が偽物の予告状を本物だつて判断したの知ってるだろ？それと一緒にだよ！！」
と快斗は言い返した。

『そうか…ならいい…あつ、そうそう、警察やマスコミにとっては10ヶ月ぶりの怪盗キッドからの予告状だから明日には全国的に大ニュースになつてるはずだ…』

と新一が言った。

「だろうな…それがどうかしたか？」

と新一が言いたいことがよく分からない快斗が聞くと、新一はため息をついて、

『だから！当然明日には大阪にもそのニュースが流れる…つまり、服部がそのニュースを知ると、あいつは、今の俺みたいに怒鳴り込むだろうな…誰もいない俺ん家に戻ってから電話してる俺とは違って所かまわず…それを大阪府警本部長の服部の親父さんに聞かれた

ら…』

と新一が言うと、

「たちまち逮捕されちゃうな…」
と快斗も答えた。

『だからあいつにはあらかじめ連絡しといた方がいいぜ、』警視庁に怪盗キッドから予告状が来たけど俺じゃない』って…』
と新一が助言すると、

「そつだな…』服部君に連絡よろしくね新一！』」
と蘭の声で新一に頼んだ。

『蘭の声出すなバー口！！それに俺がそこまでする筋合いねーよ！』

と言って新一は電話を切った。

新一が電話を切った後、

「チエツ…」

と言いながら快斗は平次に電話した。

しばらくコールした後、

『おつ！黒羽！！久しぶりやな〜！！どないしたん？』
と平次のハイテンションな声がした。

「ああ別に大した用じゃねえけど、明日、怪盗キッドからの予告状ってニュース流れると思うけど、それ俺じゃねーから…ただの模倣犯だからな！あらかじめ言つとかないとオメーまで怒鳴り込んできそつだからな…」

と答えた。

『ホー…偽物からの予告状か…面白そうやんけ！…ヨツシャー！！今度の土日東京行くさかい、中森警部に捜査手伝わせてもらえるように青子ちゃんに頼んでもろうつといてや！！工藤にはこっちから連絡しとくさかい！！ほなよろしゅうな！！』

と言って平次は電話を切った。

そのテンションの高い声は青子にも十分聞こえていて、

「じゃあ青子…お父さんに頼んどくよ」
と言った。

10分後、快斗の携帯に、

『工藤に話つけといたで…！土曜日に工藤ん家に集合や…！』
と平次からメールが来た。

第4章 工藤邸にて

土曜日、快斗と青子が工藤邸に到着するとすでに蘭も平次も和葉も集まっていた。

「で、どうやった？中森警部OKしてくれたか？」

と平次が青子に聞くと青子は申し訳なさそうに、

「ゴメンね…お父さん『探偵の手なんか借りてたまるか！』って言って許してくれなかった…」
と言った。

すると快斗が、

「まあ、あの警部…探偵嫌いだからな…特に新一はへりの上から勝手に指示してたせいで敵視されてるからな…まあここにはいない白馬も敵視されてるけど…」
と呟いた。

快斗の台詞に新一は、

「ああ…あの時計台の事件ね…」

と納得したように言った。

「けど、どないしょー…せっかく東京まで来たのに…」

と平次が困ったように言うと、

「ああ…その事なら 問題ないぜ…ホラ、今回偽物が狙う宝石のデータとその宝石の展示場の見取り図」

と新一が全員に宝石のデータのデータと展示場の見取り図を配った。

「これどないしたん？工藤君…」

と和葉が驚いたように聞くと、

「新一が園子に頼んで送ってもらったの！その宝石の持ち主は鈴木会長だから」

と蘭が説明した。

「で、予告状は？」

と快斗が聞くと、

「それはこれから警視庁に言っ て見せてもらうんだよ！ ！暗号は実物を見ないと解らないやつもあるからな！ ！」
と新一が答えた。

「せやけど、中森警部に協力断られたんやる？」
と平次が聞くと、

「中森警部じゃないさ…あの人は協力させてくれないと思ったから園子に頼んで茶木警視に頼んでもらったんだよ…警視と同じ大学のOBだつて意気投合してた鈴木次郎吉相談役経由でな！ ！…ホラ、警視庁に行くぞ！ ！」

と新一は部屋を出て行った。

「工藤つて 利用できるものはなんでも利用するタイプの人間なんやな…」

「ああ…園子ちゃんに頼んで鈴木財閥の権力利用してるし…」

と平次と快斗は呆れていたが、和葉と青子は、

「工藤君仕事早いな」

「うん…」

と関心していた。

そんな4人の会話を蘭が苦笑いしながら聞いていると、

「オイ！ オメーら早くしねーと置いてくぞ！ ！」

と怒ったように戻って来た。

第5章 警視庁へ

新一達が警視庁に向かう途中、和葉が、

「なあ工藤君、この偽物のキッドが狙ってる『天空の雫』スカイトロップってどんな宝石なん？」

と尋ねた。

新一が、

「ああ…アジア最大のラピスラズリで、まるで空の色みたいな色だからこの名がついたらしい…」

と答えると青子が、

「じゃあ、すごく綺麗なんだろうな〜!!青子早く見たいな〜!!」と目を輝かせながら言った。

一方、快斗は、

「アジア最大のラピスラズリってことは…ビッグジュエルってことだよな?その偽物なんで、俺と同じようにビッグジュエルを狙うんだ?」

と呟いた。

「そういえばそうだよね…なんでだろ?」

と快斗の言葉に蘭も同調すると、

「もともとその『天空の雫』とやらが狙いで、それがビッグジュエルやったからカモフラージュとして怪盗キッドを名乗るとちやうか?警察は盗んだのはキッドやと思うところから自分は疑われるはずないと踏んでな…」

と平次が自分の意見を述べた。

平次の意見に、

「まあ、それがまだ状況がよくわかってない今考えられる最も妥当な案だな…」

と新一も同意した。

警視庁捜査二課に着くと中森警部が待っていた。

新一達に気づいた中森警部は、

「まったく…茶木警視…こんな探偵達に協力させるなんて…」

と呟いた。まだ、青子達が付いて来ていることに気づいていないらしい。

「あつ！！お父さーん！！」

と青子が中森警部に手を振ると、中森警部は、

「あ…青子！？どうしてまた？」

と驚いたように聞くと青子は、

「エへ、蘭ちゃんや和葉ちゃんと一緒に快斗達に着いてきちゃった！！」

と笑顔で答えた。

その台詞で中森警部が蘭達の方を見ると、蘭と和葉は慌てたように会釈した。

「相手は怪盗キッドなんだぞ！！ガールフレンドなんて連れてきて

…その油断が命取りになるんだぞ！！」

と中森警部がイライラしたように言うと、

「まあ、ええやんけ…今日キッドが来る訳やないし…」

と平次がニコニコしながら中森警部をなだめた。

「とにかく警部さん、予告状を見せてください」

と新一が言うと、中森警部はすごく苦々しい顔をして、

「ホラよこれだ！！」

と予告状を見せた。

そこには、

『今年最初の聖夜の日が始まる時、米花博物館に展示されている鈴木財閥の『天空の雫』を頂きに参上する。』

怪盗キッド』と書かれていた。

第6章 暗号解読(前書き)

暗号が少々無理やりかもしれません。

第6章 暗号解読

「『今年最初の聖夜の日が始まる時、米花博物館に展示されている鈴木財閥の『天空の雫』を頂きに参上する。」

怪盗キッド『?』

と青子が予告状を読み上げた。

「そうだ…これが奴からの予告状だ!!」

と中森警部が熱くなっていると、

「聖夜言ったらクリスマススイブのことやない?」

と和葉が言った。

和葉の台詞を聞いた蘭が、

「じゃあ始まる時ってことはクリスマススイブが始まる時ってこと?」

と意見を出すと青子が、

「解った!!クリスマススイブが始まる時…つまり12月24日の日の入りの時間よ!!」

と嬉しそうに言った。

中森警部も、

「ああ…ワシもそう思って24日の昼には警備を万全にするつもりだ!!」

と言った。

しかし、

「あの…悪いけどそれじゃもう遅いですよ…」

「ああ…もう盗まれた後や…」

「予告の時間はもっと前ですしね…」

と快斗、平次、新一の順に否定した。

「もしかして3人共解ったの?」

と蘭が聞くと3人は『当然』という表情をしていた。

「だったら教えてくれないかね…」

と中森警部が苦々しく言ったが3人は平然として、まず平次が、

「聖夜つちゆうのは和葉の言った通りクリスマスイブのことやけど、『聖夜の日』ってわざわざ『日』をつけてるのは24日の夜と限定しないためや…」

ここで快斗が続きを引き継いで、

「次に『今年最初の聖夜の日が始まる時』っていうのは、この地球上で最初に24日が始まる時っていつのを示しています！」

と言い、最後に新一が、

「つまり、日付変更線が24日の午前0時になる瞬間を指しているのです…日付変更線と日本との時差は3時間…つまり、日本では午前0時になる3時間前…12月23日の午後9時に彼は現れるということですよ…」

と言って3人の推理を終わらせた。

「な…なるほど…」

さすがの中森警部も3人の推理に関心して、

「よし…奴は23日の午後9時に現れる…！今度こそ奴に一泡吹かせてやる…！」

と燃え始めて、

「それでは…僕達帰るんで…また23日に…」

と新一が言っただけで一同が帰って行くのに気づいていなかった。

第7章 当日の昼（前書き）

サブタイトルがなんか微妙です。

第7章 当日の昼

偽物の予告当日、新一、蘭、平次、和葉、快斗、青子は工藤邸早めに集まって作戦の最終確認をしていた。

「黒羽に協力してるってことは完璧に俺ら本物の怪盗キッドの共犯者だな…」

と新一が呟くと当の本人である快斗は、

「いいじゃん！今回の目的は盗みじゃねえし〜！！」

と笑いながら言った。

「そらそつや！！」

と平次も笑いながら言つと、新一は、

「楽道家…」

と呟きながらため息をついた。

「まあ、でも東西の名探偵の新一と服部君に本物の怪盗キッドの黒羽君がいるんだから大丈夫なんじゃない？」

と蘭が言つと和葉も、

「せや！！平次達3人なら偽物なんてたちまち捕まえてまうやる！！」

と笑顔で言つた。

そんな中青子は快斗に向かって、

「快斗！頑張つてね！！偽物に出し抜かれたりしたら赤恥よ！！あと絶対お父さんに捕まんないでね…」

と少し心配そうに言つた。

快斗はそんな青子を驚いた表情で見て、

「まさか青子にキッドとしてやることを応援されるなんて思わなかったな…」

と少し赤くなりながら呟いたのであった。

作戦の最終確認が終わった後、一同は米花博物館に向かった。

博物館に入った途端、

「いいか！？予告時間までまだ時間があるからといって油断するんじゃないぞ！！変装は奴の十八番だからな！！今日こそ奴の仮面を剥ぎ取って奴を白日の下にさらしてやるんだ！！」という中森警部の叫び声が聞こえてきた。

「いつにも増して気合い入ってるな〜お父さん…」

と青子が呟くと、6人の後ろから、

「そりゃあ…久しぶりの彼との対決だもの気合い入るに決まってるじゃない！！」

という声がして、一同が振り向くと、そこには園子が立っていた。

園子は、

「和葉ちゃんに青子ちゃんあと服部君に黒羽君久しぶりね！！」

と言ってから、

「相変わらず…蘭と新一君に和葉ちゃんに服部君、青子ちゃんに黒羽君の3組みのカップルは仲がいいこと…」
と冷やかした。

その台詞に6人全員が赤くなっていると、

「まあ、男共3人はキッド様にけちよんけちよんにされないように頑張ってね〜」

と言って、6人を博物館の裏に案内した。

「キ…キッド様！？」

と快斗がキッドであることを知り、キッドになった理由も知った後、キッド嫌いは無くなったものの、怪盗キッドの大ファンというものが未だに理解できない青子は園子の発言に驚いたのであった。

第8章 忠告

新一達は園子に連れられて美術館の別館の最上階のある部屋に来ていた。

「ジャーン！！ここが園子様特設ルームです！！」

とハイテンションで言う園子に新一が、

「園子様特設ルーム？」

と呆れたような表情で聞くと、

「ここでキッド様が来るのを待つよ！！彼がハンググライダーで来てもここならバッチリ見えるし、このテレビ画面は美術館の監視カメラの映像が見られるしね、まあ、新一君達がキッド様と対決するのを私達はここで見てるってわけ！！」

と園子が嬉しそうに説明すると、キッド本人の快斗は苦笑いをしていた。

「まあとにかく、俺らは美術館の方に行くから！！」

「いくら美術館の見取り図見ても本物見んと話にならんしな！！」

「見取り図に描いてないことに重要な部分があるかもしれないねーしな！！」

と言って男3人は部屋を出て行った。

「さて、黒羽…お前ならどう入る？」

新一は厳重な警備の中侵入することに関して天才的な快斗に尋ねた。

「そうだな…俺ならここを…」

と快斗が説明を始めた時、

「あつ！！新一お兄さん達だ！！」

と声がした。

3人が振り返るとそこには阿笠博士と少年探偵団がいた。

「オ…オメーらどうして？」
と聞くと、

「スマン、スマン…この子達がどうしてもキッドを見たいと言っ
んで…」

と博士が言つと新一は、

「ったく…」

と呟いて、

「しゃーねーな…子供達を予告時間までこんなとこにいさせるのも
なんだし…蘭達がいる部屋で大人しくしてもらうか…」

と言つて新一は博士と子供達を園子様特設ルームに案内連れて行っ
た。

新一、快斗、平次が博士と子供達の後ろを歩いていると、さらに
後ろにいる哀が、

「ねえ…ちよつと…」

と小声で呼び止めた。

「なんだよ？」

と新一が小声で答えると、

「今回の予告状…黒羽君じゃない別人からなんでしょ？」
と尋ねた。

「ああ…そうや…黒羽やない…」

と平次が答えると、

「なら本物のキッド以上に注意してかかることね…」

とさざりと言つた。

「オイどういふことだよ哀ちゃん！？…俺以上に注意しろって！」
と快斗が小声ながらも強い口調で言つと、

「呆れた…IQ400の怪盗キッドさんなのに分からないの？」
と冷たく言い放つた後、

「今回の偽物は黒羽君と違って殺人をしないという保証はないわ…
追い詰められたらそれこそ何しか分からない…つまり…本物

のキッド以上に注意しないと殺されかねないってことね……」
と答えた。

哀の台詞に新一は、

「ああ……もちろんそのつもりでいたぜ……」
と答えた。

「ならいいけど……」

と哀は肩をすくめて、

「哀ちゃん早くー!」

と歩美に呼ばれて歩美の方に行った。

「相変わらずあのネーチャンキツイな……」

と平次が言っていると

「ああいう性格だからな……」

と新一は少々ジト目で答えたが、すぐ優しい目になって子供達をみた。

「ん?どうした新一?」

と快斗が聞くと、

「なんか、あいつら見てると弟や妹みたいな感じがすんだよな……」
と呟いた。

第9章 少年探偵団潜入（前書き）

サブタイトルが微妙です。

第9章 少年探偵団潜入

子供達を園子様特設ルームに連れて行った後、新一が美術館を警備していると、怪しく動く影を見つけた。

（偽キッド！…にしては小さいな…何人かいたし…ということは…）

と呆れた表情になりその影に向かって、

「オメーら…何してんだ？」

と言うと影達はギクリとして振り向いた。

その影とは見つからないようにこっそりとほふく前進していた元太、光彦、歩美だった。

「で、何してんだ？」

と新一が再び聞くと、

「だってキッドと対決したいじゃんかよ！！」

「僕達少年探偵団なんですから！！！」

「それに宝石も見たいし！！！」

とそれぞれ言った。

「ダメだ！！！」

と新一が言うと、

「まあええやん工藤、宝石見せるくらいなら」

と平次が口を出してきた。

「にしても、ほふく前進で来るなんてやるじゃん！！！」

と快斗は3人を誉めていた。

「へへっ！暗いから新一兄ちゃんに見つかるまで誰にも見つかったぞ！！！」

と元太が言うと、新一は何か考え始めた。

快斗は、

「でも宝石見たいなら中森警部に許可を得ないとな！！平次！許可貰って来てくれよ！俺は青子達呼んでくる！！青子達も宝石を見た

いって言ったたし…新一はこの探偵君達の面倒宜しく!!」
と言って、園子様特設ルームに走って行った。

新一が考え事をしながら子供達と待っていると、快斗より先に平次が頬をさすりながら戻って来た。

「どうだった？」

と新一が聞くと、

「許可は貰ったで…警部の立ち会いのもとやけど…にしても、あの警部に思いつきり顔つねられたわ…キッドの変装やないかって…あらメツチャ痛いで…」

と答えた。

その後快斗が蘭、青子、和葉、園子、哀を連れてきて中森警部と一緒に宝石を見に展示室へ行った。

第10章 天空の雫（前書き）

駄文ですがよろしく願います。

第10章 天空の雫

新一達は中森警部に連れられて展示室にきた。

「ほら、これが天空の雫だよ！」
スカイドロップ

と中森警部がガラスケースに入った天空の雫を指差しながら言った。

「わ〜！！すごい！！！」

「こんなデカい宝石があればうな重何杯食えるかな？」

「元太君：そればつかですね…もつと他の感想は無いんですか？こんな凄い宝石をみて！！！」

と子供達が言った後、

「青子、今までいくつかのビッグジュエルを見たけど…今までで一番大きいよ！！！」

「世界最大のラピスラズリやって聞いてたけど…こんなに大きな宝石あるんやな…」

「ホントに空の色みたい…綺麗…」

と青子、和葉、蘭の順で宝石の感想を言った。

「でしょー？私も初めて見たときは見とれちゃったんだから！」

と園子が紹介していたが、一方で男性陣は、

「このケースは硬質ガラスだな」

「まあ、そんなくらいしとかんとすぐ盗まれてまうやろうからな…」

「まっ、俺ならこんなケースじゃ簡単に盗めるだろうけど」

と警備のことを話していた。（中森警部に聞こえないように）
すると、

「ちょっと、あなた達が夢の無い警備の話なんかしてるから雰囲気ぶち壊しよ…」

と哀に注意された。

注意された3人が周りを見ると、哀だけでなく蘭、和葉、青子も3人のことをジト目で見ていた。

しばらくしてから、

「そろそろいいかね？警備の邪魔だから…」

と中森警部に言われて展示室を出て、園子様特設ルームに戻る女性陣と子供達と別れた快斗と平次は、

「さて、警備どうする？」

「まあ、なんもせんでも予告の時間になったら偽物は来るやろっけど、やっぱり相手の裏をかく手が欲しいな〜！！」
と悩んでいた。

すると新一が、

「偽物を捕まえる手なら一応考えたぜ…」
と言った。

「ホンマか工藤!？」

と平次が聞くと、

「ああ…元太達のおかげでな…」
と答えた。

「で？どんな手だ？」

と快斗が聞くと、新一は、

「その前に黒羽…いくつかオメーにやってもらわないといけねえことがあるんだけどな…」
と言った。

第11章 予告時間(前書き)

いよいよ偽物登場です。

第11章 予告時間

午後8:56

「奴が来るまであと4分!! いいか者共!! 今日こそ奴の両手に鉄のプレスレットを飾ってやるんだ!!」

と中森警部が怒鳴っていた。

すると、部下の1人が、

「警部、工藤探偵や快斗君達が見あたりませんが…」
と辺りを見渡しながら聞いた。

中森警部は、

「さあな…どうせ勝手に何かしてんだろ…ほっときゃいいよ…」
と興味なさげに言った。

4分後、

「そろそろ時間だな…」

と中森警部が言った途端、

ズドン!!

ズドン!!

と2回の爆発音がした。

「どうした!?!」

と中森警部が無線で聞くと、

『で…電気室が爆発されました!!』

「ば…爆発!? さっき調べた時は異常なかっただろ!?!」

「そ…それが…電気室の外側の壁から爆発されて…」

「なっ!?!」

と中森警部が驚いているとき、

パシユ!! パシユ!!

と数回の空を切る音と、

パリン！！

とガラスの割れる音がした。

「しまった！！」

と中森警部がライトでガラスケースを照らすと、ガラスケースは割られ、天空の雫がなくなっていた。

「くそっ！！」

と中森警部が悔しがっていると、

「警部！！どうやら拳銃でガラスケースを割ったようです！！」

と機動隊の1人がまだ熱を帯びた薬莢を拾いながら言った。

「キッドが拳銃だと！？」

と中森警部は一瞬うろたえたが、

「構わん！！奴を追うんだ！！」

と部下達に命令した。

一方、作戦である場所に身を隠している新一、平次、快斗は、快斗があらかじめ中森警部に取り付けて置いた盗聴器で状況を聞いていた。

「壁ごと爆発させたり、拳銃でガラスケースを割ったり、思った以上に物騒なやつぢやなー……」

「こりゃ、俺と違ってマジで人殺しかねないな……」

と平次と快斗が呟くと、

「シッ！！もうすぐ奴が来る！！いいか2人共……マジで気をつけるよ……！！」

と新一に注意された。

新一は2人を注意した後、

「黒羽！！そろそろ……」

と言った。

快斗は頷いて、無線を取り出し中森警部の声色を使って美術館の

上空を飛んでいるヘリコプターにある1ヶ所にライトを集中させるよう命令した。

「これで、後は奴が作戦に引っかかるのを待つだけやな……」

と平次が呟くと、快斗も、

「ああ……」

と答え、

「じゃあ後は打ち合わせ通りに……」

とキッドの気配を一瞬出して言って、それぞれ自分の持ち場についた。

第12章 対面（前書き）

偽物と本物の対面ということでのこの題名にしました。

第12章 対面

偽キッドが屋上へ通風口出口から出た時、すでにそこはヘリコプターのライトで照らされていて偽キッドは光に照らされた。

偽キッドが光から逃れようと動こうとした途端、ヘリコプターのライトが一斉に消えた。

偽キッドは一瞬不信に思ったがチャンスだと思い、逃亡しようとして走り出した時、

「さて、逃げるのはまだ早いんじゃないのか？」
と声がした。

偽キッドは振り返ったがそこには誰も居なくまた前を向いたら、偽キッドの前に快斗が黒い布を持って立っていて、偽キッドの左右にはそれぞれ快斗同様黒い布を持った新一と平次が立ちふさがっていた。

「何!？」

と偽キッドが驚いていると、新一が

「よお怪盗キッド…やけに驚いているがお前ほどの奴がこんな単純なトリックがわからないわけあるめーな…?」

と偽物とわかつていながら聞いた。

「俺らはずーっとここにおったで…体をうつ伏せてこの黒い布を被ってな…この屋上の床は黒いからな…」

と平次が言つて、

「まあ普通ならすぐバレちまうがさつきへりで一斉に照らしてお前の目を眩ませたおかげで気付かれなかったって訳!お前を照らした後一斉にライトを消したのは辺りを真っ暗にして余計気付かれにくくしたんだよ」

と快斗は楽しそうに言った。

その時、

「キッドオオオ!」

と中森警部が通風口から10人ほどの機動隊と一緒に出てきた。

追い詰められた偽キッドは拳銃に手をかけたが快斗がそれ以上の早さでトランプ銃を放ち偽キッドの拳銃の銃口を切断した。

「か…快斗君がどうしてキッドのトランプ銃を？」

と中森警部が驚いていると快斗は、

「ああ警部…残念ですが彼は怪盗キッドではありません…」

と偽キッドを指差して言った。

「ハア？どうということだ？」

と中森警部が聞くと、

「それは…こういうことですよ…！」

と言って、わざわざ自分の顔のマスクを剥がして、怪盗キッドに早変わりした。

「キッドが2人…！」

と中森警部が驚いていると平次が呆れたように、

「だから…俺らが困るでるキッドは偽物や…黒羽に変装して偽物を捕まえようとしてたんや…！」

と快斗本人がキッドだと言えないため嘘の説明をした。

平次の説明のあとキッドは、

「ええ…その宝石を盗むつもりはありませんが、私の名を語る偽物が現れたとなると黙っていられなかったので再び翼を広げました」

と説明をした。

「なら、お前も今の目的は俺達と同じで偽キッドを捕まえるってことか？」

と新一が聞くと、キッドは、

「ええ…」

とクールに答えた。

キッドの答えに平次は、

「なら、一時休戦で偽物を捕まえる協力しようやないか…」
と言った。

第13章 呉越同舟

2人の探偵がいきなりキッドに協力すると言い出したため中森警部は、

「オ…オイ…何を急に？」

と戸惑っていたが、新一は冷静に、

「この場合キッドよりも現行犯である偽物を捕まえる方が先決です…それにはキッドを協力した方が都合がいいじゃないですか…」
と冷静に言った。

「ならキッドが快斗君に変装してたのも知ってたのか!？」

と中森警部が驚いて聞くと平次も冷静に、

「もちろんや…まあ心配せんでも偽物捕まえたら本物も捕まえたるで!…」

と、どこからか持つて来ていた鉄パイプを構えながら答えた。

新一と平次の言葉を聞いてキッドは、

「ホー、そうでしたか…けど私はこの偽物を少々懲らしめたら家へ帰るつもりなので、あしからず…けど、私も名探偵のお2人と同意見です…ここは協力した方が得策ですね…」

と偽物にトランプ銃を向けた。

「チッ…」

と偽物は舌打ちをして逃げようとしたが足元にキッドがトランプ銃を撃つたので動けなかった。

「隙有りや!!」

と平次が偽キッドに鉄パイプで殴ろうとしたが、偽物はなんとかそれをかわした。

しかし平次は陽動で偽物がかわした瞬間、平次のすぐ後ろにいた新一が腕時計型麻醉銃を発射した。

「フニヤ…」

麻醉針が当たった偽物が倒れた時、天空の雫が偽キッドのポケット

から出てしまった。

それをキッドが拾うと、

「キッド!!その宝石は諦める!!今日こそお前のキザな仮面を剥ぎ取ってやる!!」

と中森警部が部下に眠っている偽物を確保させた後に叫んだ。

「さっきも言った通り私は偽物を懲らしめに来ただけ…宝石を盗むつもりはありませんよ…中森警部!」

と言って、中森警部に向かって天空の雫を投げた。

中森警部がそれをキャッチするのに、皆が気を取られている間にキッドは、

ボン

と煙幕弾を破裂させた。

煙幕が晴れるとキッドの白いハンググライダーが飛んで行くのが見えた。

「全員奴を追え-!!」

と機動隊に命令した中森警部だったが、

「待つてください中森警部!!」

と新一に止められた。

「なんだ?」

と不機嫌に中森警部が聞くと、

「今日僕達と一緒に来た黒羽は本物だったのでキッドは途中で黒羽に変装したはずですよ…なら本物がこの近辺におそらく眠らされていると思います…で、僕と服部で黒羽を探しますがもう1人いた方がいいと思うんです…」

と説明した。

「そうだな…」

と中森警部が納得した時、

「なら自分が…」

と1人の機動隊員が名乗りをあげた。

「じゃあ君に任せた!!他の者は今すぐ奴を追うぞ!!!!」

とその機動隊員に任せて中森警部は他の機動隊員達と走って行った。

第14章 偽物逮捕後

中森警部がいなくなった後、快斗を探すために残った機動隊員が、「作戦成功!!」

と快斗の声で嬉しそうに言った。

「にしても、ダミー人形なんて黒羽がいつも使ってる手なのによくあんなに騙されるよな…中森警部…」

と新一は少々呆れたように言うと、

「まあええやんけ!!偽物を無事捕まえたんやし宝石も無事なんやから!!こんな無駄話よりさっさと次の作戦やるで!!」

と平次が言った。

「じゃあ打ち合わせ通りに…」

と新一が言つて3人はバラバラに別れた。

快斗は機動隊員に変装したまま美術館の外にある林に入り、林の奥で父親、黒羽盗一の付き人だった寺井と合流した。

快斗は変装を解いて変装道具を寺井にわたして、

「じゃあ、ジイちゃん後はよろしく!!」

と言った。

寺井は、

「わかりました…」

と言つて快斗を催眠ガスで眠らせて近くの木に縛りつけて林から出て行った。

15分ほどして、新一は快斗にわたしてあつた発信機を頼りに快斗を見つけて、無線で中森警部に快斗を見つけたことを連絡した。

中森警部が新一ががを見つけた所に行くですでに平次と平次が呼んだ青子、蘭、和葉、園子、少年探偵団が来ていた。

「この通り黒羽は薬で眠らされてロープで縛られています」と新一が説明して、

「さつきから揺らしたりしとるのに全く起きる様子があらへん…きつと協力的な薬かがされたんやろうな…」と補足した。

「そうか…」

と中森警部が言うと、

「もしかしたら青子ちゃんなら起こせるんじゃない？」と蘭が言った。

「なんで？」

と青子が聞くと、

「白雪姫は王子様のキスで起きたんやから逆もありませんじゃない？」

と園子が面白そうに言うと、青子の父親の中森警部は、

「そりゃいかん!!」

と拒否した。

すると和葉は、

「なにもキスしろとは言っていないで…青子ちゃんのモーニングコールなら黒羽君も起きるんちゃうかって話や!!」と説明した。

園子のセリフに真っ赤になっていた青子だったが和葉の説明で納得して、

「分かった!!」

と言った後何か思いついたようにニヤリとして快斗の耳元で、

「魚魚魚魚魚魚魚魚魚魚魚魚…」

と念仏のように唱え始めた。

快斗は次第にうなされて最終的に、

「ギョー!!!」

と奇声をあげて目を覚ました。

快斗が目を覚ました後、中森警部は、

「そういえば、君達と快斗君を探してた機動隊員はどこだ？」

と新一と平次に聞いた。

「それがさつきから連絡が取れないんです……」

「まあ大方あの機動隊員がキッドで黒羽を探すふりをして逃げたんやろ……」

と伝えた。

第15章 引退宣言

平次はさらりと言ったのだがそのセリフに中森警部は、「何〜!？」

と驚いたように叫び、部下に連絡しようと胸ポケットの中からトンシーバーを取り出した。

その時、1枚の紙が中森警部のポケットから落ちるのを蘭が見つけて、

「中森警部、何か落ちましたよ」

と言ってその紙を中森警部にわたした。

最初、身に覚えの無い紙に不思議そうな顔をしていた中森警部だったが紙に書いてある内容を見て、

「何〜〜!?!？」

と叫んでから硬直してしまった。

「オイ…固まつちまつたぞ…」

「何かあったのでしょうか？」

「中森警部!!大丈夫？」

と子供達が口々に言ったが中森警部に反応はなかった。

「どんなことが書いてあればこんな風に硬直できるのかしら？」

と哀が呆れたように言うとな新一が硬直している中森警部の持っている紙を取って読み上げた。

「なになに?…」

『親愛なる中森警部へ』

今宵の私のラストステージお気に召していただけたでしょうか？

実は私、目当ての宝石を既に手中に収めこの白き翼を閉ざし再び広げることには無いと思っていました。

しかし、今回私の名を語る不届き物が現れたという噂を聞き、私の偽物を捕らえ中森警部にお別れを言うために二度と広げることの無いと思っていた白きを再び広げここに降り立ちました。

もう二度とお会いすることは無いでしょうがお元気で

『怪盗キッド』

…どうやらキッドの引退宣言らしいな…」

「エエ…!? キッド様引退しちゃうの!?」

と園子は残念そうに言い、和葉は、

「そら、中森警部が硬直してるのもわかるわ…」

と納得していた。

青子は中森警部が未だに硬直しているのに気づいて、

「お父さん!! しっかりしてよ!!」

と大声で言っつて中森警部は我に帰って、

「いかん、このことを皆に知らせないと…」

と言っつて走っつて行った。

残された、新一、蘭、快斗、青子、平次、和葉、哀、園子、少年探偵団だったが快斗が、

「帰るか…」

と言っつたため、帰ることになった。

第16章 朝

次の日、新一が目を覚まして、リビングに行くと、快斗が新聞を読みながらくつろいでいた。

「テメー…何勝手に人んちで新聞読んでくつろいでるんだ？」

と新一がイラついた口調で聞くと、

「何って…米花美術館は米花町でわざわざ江古田まで帰るの面倒くさいから新一の家に泊めてもらったんじゃない！！ちようど平次達も泊まってるし…」

と快斗は平気な様子で答えた。

確かに、新一は昨日快斗に、

「この美術館新一んちに近いし俺も泊めてくれよ！！家まで帰るの面倒くさいし…どうせ平次と和葉ちゃん泊めるんだしさ！」と言われて快斗を泊めた。

ついでに、

「じゃあ、青子もいい？青子、和葉ちゃんと一緒にもつとお話したいし！！蘭ちゃんも一緒に新一君の家泊まるつよ！！」

と青子が言ってきたので蘭と青子も泊めている。

話を戻して、

「オメーをここに泊めたのは覚えている…けどなんで人んちの新聞をあたかも自分の物のように読んでいるのか聞いてるんだ！！」と新一が言つと、

「だって昨日、俺は怪盗キッドの引退宣言したんだぜ！！それについての記事読みだいじゃん！！」

と言つて、新一に新聞の一面を見せた。

一面には、

『怪盗キッド引退！！』

と見出しが大きく出ておりさらに怪盗キッドの写真が大きく出ていた。

「しかも一面だけじゃなく三面までずっと俺の記事で埋め尽くされてるんだぜ」

と嬉しそうに言っている快斗に新一は言い返す気力を失っていた。

「にしても、夜中まで推理小説読んで朝起きれない新一がこんな早く起きるなんて意外だな…蘭ちゃんや和葉ちゃんが早く起きてくると思ってたけど…」

と快斗が言つと、

「どうせ、夜遅くまで話し込んでたんだろ…」

と新一が言つと、

「悪かったわね夜遅くまで話し込んで…」

「なんで青子は早く起きてくるって思ってたないのよ快斗？」

という2人の女の子の怒った声がした。

新一と快斗が振り返ると、蘭と青子が怒った表情で立っていて和葉がその2人をなだめていた。

「もういいもん!!今日の朝ご飯は鮭の塩焼きにしてやる!!」

「あとレーズンパンね!!」

と青子と蘭がそれぞれの彼氏が嫌いな食べ物朝食に出すと宣言して、新一は青ざめ、快斗にいたっては、

「そ…それだけはやめてくれ青子様…」

と完全に怯えていたのであった。

「ところで平次は？」

と和葉が聞くと、新一が、

「まだ寝てんじゃね？」

と答えた。

「そうなん?せやったら起こしてくるわ!」

と和葉は平次を起こしに行ったが、数分後、イライラした様子で戻って来て、

「アカン、全然起きん…蘭ちゃん、青子ちゃん、平次の分の朝飯作らんでええよ…」

と言っていた。

こうしてクリスマスイブだというのに新一、快斗、平次は大切な彼女を怒らせ、最悪の朝食となったのであった。

朝食の後、新一、快斗、平次はなんとか彼女達の機嫌をなおすことに成功し、それぞれ彼女とデートに行くことになった。

第17章 トロピカルランドにて

「蘭どこ行きたい？オメーが行きたい所に連れて行ってやるよ!!」
工藤邸を出た直後新一が聞くと、

「じゃあトロピカルランドがいい!!」

と蘭は答えた。

「トロピカルランドか…いいぜ行こう!!」

と新一は言つて2人はトロピカルランドへ向かった。

「でも、新一とトロピカルランドに行くと事件起きないか心配だな

…」

トロピカルランドへ向かう途中ふと蘭がつぶやいた。

「なんで？」

と新一が聞くと、

「だって新一とトロピカルランドに行くと必ず事件起きるんだもん
…ジェットコースター殺人事件が起きて、その後新一がコナン君に
なっちゃったり、スケートリンクでも殺人事件が起きたり、私が記
憶喪失になったとき命狙われたり、和葉ちゃん達とトロピカルラン
ドに行こうとした時は赤馬の放火事件で行けなかつたし…」

と今までの例を挙げ始めた。

「あー…わかつた、わかつた…」

と新一が途中で蘭のセリフを制止すると、

「まっ、新一が探偵になつてからトロピカルランド以外でも新一と
遠出すると大抵事件に遭遇するんだけどね!」

と蘭が付け足した。

「ニヤロ…」

と新一が毒づくところちょうどトロピカルランドに着いて、

「トロピカルランドに着いたよ！！早く来ないと置いてくよ……！」
と言って蘭が走りだしたので、新一も、
「お、おい待てよ蘭！」
と言って蘭を追いかけた。

トロピカルランドに入って、

「どこ行こうか新一？」

と蘭に聞かれた新一は、

「とりあえず、悪魔の実験室にでも……」

とパンフレットを見ながら言って、蘭が怯えた表情になったのを見て、

「冗談だよ！！オメーがそういうの苦手だからからかってみただけ……！」

と笑いながら言った。

「何よそれ!？」

と蘭が反発すると、新一はニシシと笑って、

「じゃあ、ミステリーコースターにでも乗るか！！まだ10時半前だし、今なら30分も並ばないで乗れるだろうしさ……！」

と言った。

「そうね……!行こう……!」

と蘭が新一の手を引いて向かった。

その時、新一は少し頬を赤らめたのであった。

「楽しかったね……!前新一とこのコースターに乗った時は事件が起こって楽しむどころじゃなかったし……!」

ミステリーコースターに乗った後に蘭が言うと、新一は、

「だな…」

と答えながら腕時計を見て、

「まだ少し余裕があるけどそろそろ行くか!!」
と呟いた。

「えっ!?!どこに?」

と蘭が聞くと、

「行けばわかるさ!」

と言って今度は新一が蘭の手を引いて歩きだし、蘭が頬を赤らめた。

新一が蘭の手を引いて向かった先は科学と宇宙の島にある広場だった。

「ここって…」

と蘭が言つと、

「ああ…蘭が空手の都大会で優勝したときのプレゼントで見せた2時間おきに噴水のでる広場だ!!…なんだかんだ言っただかのトロピカルランドは俺と蘭の思い出の場所だからな!!」

と新一が答えた。

「だね!!新一がコナン君になっちゃったり!!」

と蘭が新一をからかうように言つたうと、新一は、

「それだけじゃなくて俺が蘭に初めて告げたのもトロピカルランドだしな…」

と言った。

心当たりのない蘭が、

「へ?」

と不思議そうな顔を見ると、

「まあ、あの時俺はコナンだったし、蘭が記憶喪失で偶然にもおっちゃんがおばさんにプロポーズしたセリフと同じだったから俺がオマエの記憶を戻すためにわざと言った言葉だと勘違いされちゃった

けどな……」

と少し残念に言った。

「それって……」

と蘭が顔を赤くしたちようどその時、午前11時になり噴水のが噴き出した。

新一は、

「ああ……オメ・のことが好きだからだよこの地球上の誰よりも『
ってやつさ!!……今でもその気持ちは同じだぜ……むしろあの時より
強くなってる……』」

と噴水の音にかき消されないように言うと、蘭はクスクス笑いながら、

「キツザ〜!!!」

と言った。

「ウツセ・な!!いいだろ!?!」

と新一が拗ねたように言うと、

「でもありがとう!!ねっ新一!!噴水止んだら観覧車乗ろう!!」
と蘭が嬉しそうに言った。

「オウ!!!」

と新一は答えて、噴水が止んだ後、2人は観覧車に乗ったのであった。

第18章 迷子

「新一と蘭がトロピカルランドに入場した頃」

「ここは…どこや？」

平次と和葉は東京の街中で道に迷っていた。

「なあ平次、一度工藤君の家に戻った方がええんとちゃう？」

と和葉が言うと、

「俺もそうしたいんやけど…」

と平次は申し訳なさそうに言った。

「ま…まさか工藤君の家への帰る道もわからへんの？」

「あ、ああ…」

「なんでちゃんと道を確認せんのか！」

と和葉が怒ると、

「仕方ないやないか！！」

と平次も応戦した。

「仕方ない…デート中で悪いけど蘭ちゃん達が青子ちゃん達に迎えに来てもらおう…」

と和葉が言うと平次は、

「無理や…ここがどこだか説明できんのに迎えに来てもらうのは不可能や…」

と答えた。

「さつき交番あつたし、そこで道聞かへん？」

「アホ！！西の名探偵が迷子になってお巡りさんなんか道なんか恥ずかしゅうて聞けるか！？」

「なんやのそれ！？」

と2人が痴話喧嘩をしていると、

「あら和葉ちゃんと服部君じゃない！！東京に来てたの？」

と佐藤刑事が高木刑事を連れて近づいてきた。

「佐藤刑事と高木刑事やん！！」

と和葉が嬉しそうに言った。

「アンタら何してんねや？私服やし、張り込みにしてもそんな雰囲気とちやうし…」

と平次が不思議そうに聞くと、

「そ…それは…」

と高木刑事が焦りだした。

「何焦ってんや？」

と平次が不思議そうに聞くと和葉が、

「そんなん決まってるやん！！今日はクリスマスイブなんやしデートやデート！！そやる？」

と笑顔で言った。

「ど…どうしてそれを！？」

と高木刑事が顔を赤くしながら驚いて聞くと、

「蘭ちゃんや園子ちゃんに2人のこといろいろ教えてもらってんで！」

「！」

と和葉は嬉しそうに答えた。

「そつなの…で、そつちもデートなんでしょ？」

と佐藤刑事が聞き返すと、

「そつやったんやけど…今は迷子になっとなってデートどころやないで…」

と平次が答えた。

「どこに行きたいんだい？」

と高木刑事が聞くと、

「和葉が東都動物園に行きたい言うてるからそこ行きたいんやけど…」

と平次が答えると、

「そうなの…地図とかある？」

と佐藤刑事が聞いた。

和葉が地図を見せると2人は丁寧に道を教えてくれた。

「2人ともおおきにな〜!!」

と和葉が言つて、2人と別れた後、平次と和葉は無事に東都動物園にたどり着くことができた。

東都動物園に来てはしゃいでる和葉を見て平次が、

「動物園ならわざわざわざわざ東京まで来んでも大阪にもあるやろ!!」
と言つと和葉は、

「せやかて今この動物園では生まれたてのホワイトタイガーの赤ちやんがあるんやで!!見てみたいやん!!早よホワイトタイガーの赤ちやんとコ行くで!!」

とハイテンションに答えた。

平次は、そんな和葉に呆れた表情をしていたが、しっかり2人で楽しんだのであった。

第19章 快斗VS白馬(前書き)

今回は快斗と青子の絡みが少ないかもしれませんが。なません。

第19章 快斗VS白馬

一方快斗は、思い出の時計台で青子のためにマジックショーをしていた。

「さて、お次のマジックはこの日のために作ったマジックです！」とキッドの口調で言うと、

「まったく…君は何を考えているのかわからないよ…」
と快斗に曰わく甘ったるいイヤミな口調の声がした。

「は…白馬君！…どうしたの!？」

と青子が驚いて聞くと、

「怪盗キッドが引退宣言を出したと聞いたんでね…急いで帰国したんだ…」

と言ってから快斗の方を見て、

「どういつつもりなのか教えて貰おうか？」
と言った。

快斗が、

「ハア?どういつつもりなのかって…んな事キッドに聞けよ!」
と言つと、

「だから君に聞いているんだよ…」
と返された。

「あのな…何度も言ってるが俺はキッドじゃないの!…」
と快斗が言つと青子が、

「白馬君って快斗がキッドじゃないかって疑ってたの?」
と聞いた。

「まあ、そういうことだね…」
と白馬が答えた。

すると青子が急に笑い出して、快斗と白馬がキョトンとしてると、
「快斗がキッドな分けないよ白馬君!お父さん、快斗が生まれる前からキッドを追いかけてるし、快斗にはキッドの予告した日に青子

とトロピカルランドで一緒だったアリバイもあるんだよ!! 第一、バ快斗が怪盗なんて大それたことできるわけないよ!!」
と快斗がキッドだとバレないように言った。

『バ快斗に怪盗なんて大それたことできるわけないよ』と言う部分に少しカチンときた快斗だったがそこは自慢のポーカーフェイスでスルーした。

白馬は、少々青子に圧倒されてたがすぐに快斗だけに聞こえるように、

「まあいいさ…現行犯逮捕は無理になったようだが…いつか君がキッドだという決定的な証拠を見つけてみせるさ!!」
と言って去って行った。

白馬が見えなくなってから、

「そついえば快斗…なんで新一君や平次君には自分がキッドだって認めてるのに白馬君には否定するの? 同じ探偵なのに…」
不思議とそうに聞いた。

快斗は少し考えて、

「なんでだろうな…なんかあの2人は完全に信用できるんだよな…
感覚つつつか…よくわかんないけどなんとなく…」

と答えた。

「ふん…」

と青子は呟いてから、

「快斗!!マジックショー続き見せて!!」
と頼んだ。

「よし!!じゃあ始めるぜ!!」
と言って快斗はマジックショーを再開し、いろいろなトリックで青子を驚かせたのであった。

第20章 決意

夜までトロピカルランドで遊んだ後、蘭は新一に連れられて米花センタービル展望レストランに来ていた。

「あれ？ここって去年の文化祭の次の日に来た…」

と蘭が言うと新一も、

「ああそうだけ…途中でコナンに戻っちまってオメーをつらい思いさせちまった所だ…」

と少々苦々しげに言った。

「でも、新一が『死んでも戻ってくる』って約束してくれた所だよ
ね！まあコナン君の口からだっただけ…」

「言ってくれるじゃねーか…」

と言っているうちに席に案内された。

「あれ？前もこの席じゃなかった？」

と席に着いた途端蘭に聞かれたが新一は、

「そうだったか？」

と惚けてみせた。

しかし内心、

(前回同様ゲンを担ぐためにこの席を予約したんだから当たり前！
なんて恥ずかしくていえるわけねーよな…)

と顔を少し赤らめながら思っていた。

すると、その表情を蘭に見られて、

「どうしたの？顔赤いよ？」

と聞かれた。

新一は焦って、

「な…なんでもねえよ！！それより早く注文しようぜ…！！」

とメニユーで顔を隠しながら言った。

「ふ〜ん…まっいつか…」

と蘭は言っつて蘭もメニユーを見た。

「そついえばさー…」

食事中、しばらくたわいのない話をしていた2人だったが蘭が少し真剣な表情で口を開いた。

「ん？どうした？」

と新一が聞くと、

「去年の文化祭の時、新一とコナン君が一緒にいたけどあれってどういうトリック？」

と聞いた。

「ああ…あれね…あれは哀がコナンに変装してたんだ…」

「哀ちゃんが？でも声もコナン君のままだったよね？」

「それは、その時、風邪引いてマスクしてただろ？そのマスクが博士の発明品なんだよ…俺の蝶ネクタイ型変声機のマスク版だな…」

「ふ〜ん…あつ！〜それと…」

蘭はまだ聞きだいたいことがあって、

「じゃあ、その時新一が言おうとしてた大事な話って？」
と聞いた。

「あ…あれね…」

と新一が緊張した面持ちで言うと、

「どうしたの？変な顔して…」

と蘭が不思議そうに言った。

「あれは…オメーに告白しようとしてたんだ…コナンに戻っちまっ
て言えなかったけどな…」

と新一が言うと蘭は真っ赤になった。

「何赤くなってるんだよ？告白なら完全に元の姿に戻った時にしてる
ぜ？」

「そ…そうだけど…」

と蘭が赤い顔のまま言うと、新一は咳払いして、

「それで…今日も大事な話があるんだ…」

と顔を赤くしながら言った。

「何？新一？」

と蘭が不思議そうに聞くと、新一はどんどんと緊張した表情になっていった。

「ど…どうしたのよ新一？」

と新一の表情に驚いた蘭が聞くと新一は何かを決心したような表情になった。

第21章 プロポーズ（前書き）

新一の誕生日に合わせて投稿しました！！

第21章 プロポーズ

さっきまで緊張したような表情だった新一が急に真剣な表情になったので蘭は少々戸惑いながら、

「ど…どうしたの？」

と聞いた。

新一は1回深呼吸をしてから、

「蘭！！俺と結婚してくれ！！！！」

と真っ赤になりながら言った。

「えっ！？」

と蘭が突然のプロポーズに戸惑っていると、新一は、

「もちろん、俺達はまだ高校生だし…すぐには言わねーよ…二十歳になったら俺と結婚してほしい！！」

と新一は赤い顔で言った。

すると、蘭の目からポロポロと涙が流れた。

それを見た新一は、

「ゴ…ゴメン…急すぎるよな…今の無かったことで…」
と謝った。

すると蘭は手で涙を拭きながら、

「ち…違うの…びっくりしちゃって…それに…凄く嬉しかったから…
びっくりさせてゴメンね…」

と微笑みながら言った。

「あ、ああ…」

と新一が答えると蘭は、

「あと、『今の無かったことで』って言われてもいまさら無理よ！
もうすっかり聞いてちゃったんだから…！せつかくなんだから私の答え聞いてよね…！！」
と言った。

蘭のセリフで今度は新一が戸惑う番だった。

そんな新一を見て蘭はクスッと笑って、

「もちろんOKよ！！決まってるじゃない！！私だっただけと新一のこと好きだったし、小さい頃から『新一と結婚できたらいいな』って思ってたんだから！！」

と赤い顔で言った。

蘭の答えを聞いた新一は立ち上がって大きな声で、

「ヨッシャー！！」

と叫んだ。

その声でレストランにいるほとんどの客が新一の方を見て、それに気付いた新一は恥ずかしそうな表情で座った。

そんな新一の様子を見ていた蘭は、

（新一って普段クールぶってるけど、やっぱり中身はホント子供っぽいんだから…）

とクスリと笑いながら思っていた。

その後、新一は蘭に何かケースをわたした。

「何これ？」

と蘭が聞くと、

「いいから開けてみるよ…」

と新一が急にぶっきらぼうになって言った。

蘭がそれを開けるとそこにはシンプルだけど蘭の好みにあった指輪が入っていた。

「これって…」

と蘭が言うつと、新一は、

「こつこついうことだよ…」

と言うつとその指輪を蘭の左手の薬指につけた。

「まったく…相変わらずキザなことやるんだから…」

と蘭が言うつと新一は、

「ウッセー！！」

と笑いながら言った。

その後、2人はレストランの閉店時間まで話をして、その後、蘭を家まで送って自分の家に帰った新一は、一足先に工藤邸に和葉と一緒に戻っていた平次に、

「なんや工藤…めっちゃニヤニヤしてんで…」

と少々不気味な物を見るような表情で言われたのだった。

第22章 クリスマスパーティーにて

次の日、少年探偵団が企画したクリスマススパーティーが阿笠邸で行われた。

参加者は少年探偵団のメンバーの歩美、元太、光彦、哀とさらに阿笠博士、新一、蘭、平次、和葉、快斗、青子、園子である。

パーティーの最中、歩美は蘭の左手の薬指に光る指輪を見つけて、「蘭お姉さん！！おめでとー！！」

と言った。

それに加えて哀も、

「左手の薬指についてるってことはそういうことなんですよ？」と続けた。

「う、うん…昨日ね…」

と蘭が赤くなりながら言うと、

「わー！！クリスマススイブにプロポーズなんてロマンチックやわー！！」

「ホント良かったね！！蘭ちゃん！！」

「うんうん…ここまで長かったような短かったような…やっと蘭と新一君がホントの夫婦になるときが来たか…」

と和葉と青子と園子が嬉しそうに言った。

しかし元太の、

「その指輪がどうかしたのか？」

という発言で一同ずっこけそうになった。

「あのですね…蘭さんが指輪をつけてるのは左手の薬指ですよね…」

「つまりあの指輪はエンゲージリングってこと…」

「つまり、蘭お姉さんは新一お兄さんともうすぐ結婚するってことだよ！！」

と光彦、哀、歩美の順に元太に説明した。

その時新一は、

「せやから工藤：昨日あんなにニヤニヤしてたんか：あら不気味や
ったな〜」

「オクテの新一もやるときはやるな!!!」

と平次と快斗に冷やかされていた。

「ウツセー!!!」

と新一が2人に応戦していると、

「で、新一、君の両親には報告したのかね？」

と博士に聞かれた。

「イヤ：まだしてねえよ：それは2人が日本に帰ってきたら：昨日
電話で帰って来るよう頼んだからな：理由はまだ話してないけど：
まあ帰って来るよう頼んだ後母さん『蘭ちゃんのウエディングドレ
スどんなのがいいかしら〜』って鼻歌混じりに言ってたけどな：
母さんそういう勘はスゲーから：」
と答えた。

こうしてクリスマスパーティーに蘭と新一の婚約パーティーもプ
ラスされパーティーはさらに盛り上がったのだった。

第23章 挨拶（工藤邸）

次の日、新一の両親がロスから帰国したので、蘭の両親より先にそちらに挨拶をすることにした。

新一が蘭と両親がいる部屋に入ると、

「蘭ちゃん！久しぶり〜！！」

と有希子がハイテンションで言ったおかげで2人の緊張は少しだけ収まった。

新一と蘭が席に着くと優作が、

「で、新一…話とは何だ？蘭君まで連れて…」
と聞いた。

一方、有希子はワクワクしたような表情でいる。

「あ、ああ実は…」

と新一は緊張したように言い、一瞬間をおいてから、

「オレ…二十歳になったら、蘭と結婚したいと思ってるんだ！！…
一昨日、蘭にそれを伝えてOKしてもらった…今日はそれを父さんと母さんに報告するために呼んだんだ…」
と言った。

本当はもう少し気のきいたセリフを言うつもりだったが緊張で新一の思考回路はメチャクチャになっていた。

（あ…俺の両親に報告するだけでこんなになるなんて…おっちゃんとおばさんに挨拶するときはどうなるんだよ！？）

と新一が頭の中で考えていると、有希子が、

「私はもちろんOKよ！！新一と蘭ちゃんが小さい頃から蘭ちゃんが新ちゃんのお嫁さんになってくれたらな〜って思ってたんだから！！」

と笑顔で言つて、優作もフツと笑つて、
「反対はしないさ、新一…蘭君を幸せにするんだぞ！」
と言つた。

「ああ…わかつてるよ…！」
と新一が答えると、

「ねえねえ新ちゃん！蘭ちゃんになんてプロポーズしたの？」
と興味津々に聞いた。

「べつ…別にいいだろ？んなこと…」
と新一が赤くなつて言つと、

「つままないの…じゃあ蘭ちゃん教えて…！」
と今度は蘭に聞いた。

蘭は赤くなりながら、

「えつと…けつこう率直に、『俺と結婚してくれ…！』でした…」
と答えた。

「へ〜」
と有希子が面白そうに新一の方を見ると新一は顔を赤くしながらそ
つぽを向いていた。

その様子を見た有希子は、
「あら、何照れてるの？そんな照れてることないじゃない 蘭ちゃ
んとは一緒にお風呂入った仲なんだから」
と言つた。

「おつ…お風呂!？」

と蘭が真つ赤になつて聞くと、

「阿笠博士から聞いたわよ…！新ちゃんがコナンちゃんだったころ
に2人でお風呂に入ったつて」
と言つた。

蘭は、

「そういえば…」
と新一を睨んだ。

「あ…あれはオメーが無理やり…」

と新一が弁解すると、

「でも、その後別の時私がコナン君にコナン君が新一だとは知らずに『一緒に入るっか』って言った時アンタ最初は嫌がってたけど、『蘭姉ちゃんかどーしてもって言うなら』とか言ってなかったっけ？」と蘭は新一に聞いた。

「そつ…それは…」

と新一が焦っていると、

「あら、新ちゃん誘惑に負けちゃったのね」

「ホー、新一もまだまだ子供だな…」

と有希子と優作が冷やかし始めた。

2人の冷やかしはしばらく続き、やっと解放された新一は、蘭の両親に挨拶に行くと言って蘭と一緒に工藤邸をでた。

蘭の両親にも蘭が探偵事務所で待っていてくれと頼みであるのだ。

毛利探偵事務所に向かう途中、

「つたく…結婚の挨拶に来た息子を冷やかす親なんて普通いねーよ

…」

と新一がぼやいていると、

「でも許してもらえて良かった…」

と蘭が安心したように言った。

「そつだな…」

と新一は答えてから、

(次は蘭の両親か…)

と緊張した面持ちで考えていた。

第24章

挨拶（毛利探偵事務所）

蘭が新一と小五郎と英理が待っている部屋に入った。

「おじやまします」

と新一が緊張した面持ちで言うと小五郎の何か悟ったのか表情が硬くなった。

「まあ座れ……」

と小五郎に言われ蘭と新一は小五郎と英理の正面に座った。

「なんか話があるんだろ……」

と小五郎が新一にいつもより低めの声で聞いた。

「はい……今日、ここで待ってていただいたのはお話があるからです……」

と新一は言つて一呼吸おいてから、

「二十歳になったら蘭さんと結婚させてください……！！」
と率直に言つて、

「確かに……僕はお2人や蘭さんを騙して江戸川コナンと名乗って居候して、お2人にとっては信用できる人間ではないかもしれない
ませんが……ですが僕は蘭さんのことを愛してます……！！僕が愛せる女性
は蘭さんしかいないと断言できます……！！なので蘭さんとの結婚を許
してください……！！」

と新一は頭を下げた。

すると小五郎が、

「オメーが信用できない奴だったら蘭とつきあわせてねーよ……」
と言つてから、

「まあ、お前がああクソ生意気な眼鏡のボウズだったときたまに思
つたよ……こんな息子がいても悪くねえなって……」

と小五郎が言い出すと英理がため息をついて、

「まったく……そんな前置きはいいからはっきり言ったらどうなの？」
と小五郎に言つてから蘭と新一に向かつて、

「私も反対はしないわ…新一君は何度も蘭のことを命がけで守ってくれたし…小さな頃からずっと蘭と一緒にいたから別居しててたまにしか蘭と会えなかった私より蘭のこと理解してるかもしれないしね…」

と優しい表情で言った。

「そんなことないですよ…」

と新一が英理より蘭のことを理解しているかもというのを否定した。すると、

「俺の話聞け…!!」

と小五郎が勝手に英理が話を進めていることに気づいて叫んだ。

「あらグダグダ長く話し続けてるあなたが悪いんじゃない?」

と英理に反論されて小五郎はばつの悪い表情をした後咳払いをして、「蘭を幸せにしるよ!!」

と新一に言った。

新一は、

「はい!!絶対に幸せにします」

と言って、蘭は涙目になりながら、

「ありがとうお父さん…絶対に幸せになるね…」
と言った。

「しかし…蘭ももうそんな年頃になったなんてな…」

と小五郎が感慨深い表情をしていると、
ピンポン

とチャイムが鳴った。

「あっ!私出るね」

と言って蘭が出ていってからしばらくして、

「あっ蘭ちゃん!!新一まだいる?」

という有希子の声がした。

第25章 予想外の

玄関での声を聞いて新一が玄関に行く和有希子と優作が立っていた。

「父さん！母さん！」

と新一が驚いて言った。

「有希ちゃんに優作さんどうしたの？」

と英理も驚いて聞くと、

「ちよつとみんなに話があつて」

和有希子が言った。

「で、有希ちゃん話つてのは？」

と小五郎が聞くと、有希子は、

「さつき新一と蘭ちゃん二十歳になったら結婚したいって言ったけど……」

といつもより真剣な表情で言った。

新一は何を言われるかと構えていたが、

「なんで二十歳になったらなの？もつと早くていいじゃない！！」と急に明るくなって言った。

「ど…どういうことだ？」

と少々脱力した新一が聞くと、

「2人の絆は確かなものだし、二十歳になるまで待たなくてもいいじゃないかってことだ」

と優作がまとめた。

すると英理が、

「それもそうね……」

と言い出したので、新一、蘭、小五郎は思わず、

「ええ〜!?!」

と叫んでしまった。

新一の両親がこういうことを言い出すのはまだありえるのだから英理がそれに賛成するのは3人とも予想外だったのだ。

一方有希子は、

「さすが英理ちゃん！わかってくれると思ってたわ」と嬉しそうに言った。

「2人はまだ高校生なんだしやはり高校は卒業した後の方がいいな……」

「それに大学生になってすぐは何かと忙しいから少し落ち着いてからがいいわね……」

「じゃあ6月がいいんじゃない？6月はジューンブライド、蘭ちゃんには幸せになって欲しいし……」

と勝手に話を進める有希子、英理、優作に新一と蘭が、

「ちょ……ちよつと！」

と止めると有希子が、

「新ちゃんと蘭ちゃんはイヤなの？二十歳になる前に結婚するの……」と聞いた。

「イヤ……イヤでは無いけど……なあ？」

「うん……むしろ早い方がいいかな……」

と新一と蘭が答えると有希子は、

「ならいいじゃない……！」

と言つて話を進めた。

「オ、オイ！！俺の意見は！？」

と小五郎が言つと、

「あら……あなたは反対なの？」

と英理に鋭い目で言われて、

「別に反対はしてねえが……こいつらはまだガキじゃねーか……」とぼつの悪い表情で言っていた。

すると、

「あら蘭だつてもう18歳よ……私たちが考えてるよりずっと大人に

なってるはずよ……」

と英理に一蹴されてしまった。

こうして小五郎と結婚する本人たちが呆然としてるなか、有希子と英理と優作が新一と蘭の結婚の話をどんどん進めていったのだった。

第26章 親友（前書き）

いよいよ完結です。

第26章 親友

「…で、二十歳になったらのはずだった結婚が急遽半年後になったわけね…」

新一と蘭が両親に挨拶をした次の日、喫茶店ポアロで園子は蘭と新一の話聞いて呆れたように言った。

「う…うん…」

と蘭が照れたように答えると園子が、

「それにしても…冬休みが始まって良かったわねえ…でなきゃ今頃うちのクラス授業ほっぽりだしてお祭り始めてるわね…センター試験までもう1ヶ月もないのに…」

と園子が言うとなしと蘭は確かにと頷いた。

「けど絶対そのお祭りの中心になってるのはお前だろ…」

と新一がジト目で言うと、

「バレた？」

とにししを笑いながら言った。

「けど新一君…蘭を絶対幸せにしなさいよ！！蘭を幸せにしないと許さないわ！！」

と新一に真剣な表情で言った。

「ああ…言われなくてもわかってるよ…」

と新一が答えると蘭は、

「ありがとう園子、心配してくれて…」

と笑顔で言った。

急にお礼を言われて少し驚いた園子だったが、

「何言ってるのよ！？親友なんだから当たり前じゃない！！」
と笑いながら答えた。

蘭もフフツと笑って、

「でもね…私、新一となら不幸になってもかまわないって思ってるんだ！新一と一緒にいるだけで幸せだから…」

と笑顔で言った。

蘭のセリフで新一が赤くなっていると園子が呆れた表情で、
「はいはい…アンタ達のラブラブっぷりはよくわかったし、ノロケも十分聞かせていただきました…ほーんとアンタ達って小さい頃からラブラブなんだから…」
と言った。

「そんなんじゃないわよー!!」
と蘭が真っ赤になって否定すると園子はおもしろくなって、
「またまた照れちゃって〜! そんな真っ赤になって否定することじゃないでしょ? 結婚するんだから!!」
と冷やかに始めた。

しばらくして、

「あっ! もうこんな時間!! 私用があるからもう行くね!!」
と言って園子が立ち上がった。

「うんじゃあね園子!!」
と蘭が言つと、

「お幸せにお2人さん!!」
と言って園子はポアロを出て行った。

園子がポアロから出た後、店の窓から2人を見ると、新一と蘭が幸せそうに話していた。

(まったく…ほーんと幸せそうなんだから…)
と園子は微笑んで、

(親友としてのひいき目なしにしてもあの2人なら絶対幸せになるわね…)
と思いながら歩き出した。

(D Z F)

第26章 親友（後書き）

最後までするか考えてなかったので変な終わりかたになってしまったかもしれない。

次回は新一と蘭の結婚式の話を書こうと考えてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7649j/>

聖夜の攻防戦

2010年10月10日18時16分発行